

スポーツ観戦が一体感を介して引き出すフロートロイヤリティ

：社会生理機構の関与

山口 峰史 （ 筑波大学 ）

1. 目的

スポーツ観戦は生理的同期と一体感をもたらす包摂的な健康戦略と期待されるが、その強化策は不明である。ストーリー理解がビデオ鑑賞時の人間の心拍同期を促すことから、スポーツ観戦が観客同士の心拍同期と心理的絆形成を対象とするスポーツのプレー経験に応じて促進すると想定し、この仮説を検証することを目的とした。

2. 研究方法

実験1 選手や観客との一体感を精度よく予測する生理的同期の分析条件の検討

バスケットボールプレーヤー10名を対象に、観戦中の心拍数を連続的に測定しながら、ハーフタイム（HT）まで観戦を行った。観戦中に取得した心拍数に対して相互相関分析を行い、心拍同期レベル（CCF, Lag）を算出した。また、相互相関分析を行っている先行研究を参考にしながら窓なし条件、窓あり条件（240秒、160秒、80秒）を設定し、各条件で同期レベルを算出した。さらに、HT時点で選手や観客との一体感を質問紙にて測定し、同期レベルとの関連を検討した。

実験2 対象とするスポーツのプレー経験が観戦時の心拍同期と心理的絆形成に及ぼす影響の検討

プレー経験が豊富なバスケットボールプレーヤー18名と一般観客44名を対象に、観戦中の心拍数を連続的に測定し、プレー中（選手がプレーをしている時間）とプレー時間外（選手がプレーしていない時間）に分けた。試合開始前、終了直後、終了15分後に唾液の採取および質問紙の回答を行った。唾液からは唾液オキシトシン、コルチゾル濃度およびその比率を算出した。質問紙では選手や観客との一体感、心理的フロー、帰属意識を評価した。

3. 結果と考察

実験1では各条件で算出された心拍同期レベルと選手や観客との一体感との関連について検討した。その結果、窓なし条件で算出された同期レベルは一体感と強く関連したが、窓あり条件ではほとんど関連がみられなかった。窓なし条件は全体を一つの枠として分析を行うことから、スポーツ観戦で全体を広くとらえることにより一体感を精度良く検出できることが明らかとなった。

実験2では、まず、オキシトシン/コルチゾル比が両群で上昇し、スポーツ観戦はオキシトシンが作用しやすいホルモンバランスが醸成することが明らかとなった。また、心拍数および心拍同期レベルはプレー中、プレー時間外に両群で有意に上昇した。一方、プレー経験が豊富な方がその高まりが顕著にみられた。また、ホームチームの選手や観客との一体感も両群で有意に上昇した。これらの関連について媒介分析を用いて検討した結果、プレー中の心拍同期は選手との一体感を介して心理的フローを促進し、プレー時間外の心拍同期は観客との一体感を介してロイヤリティを促進するという関係性が初めて確認された。

4. 結論

本研究により、一度のスポーツ観戦が個人のオキシトシン作用を促進し、観客同士の心拍同期と選手や観客との一体感を対象とするスポーツのプレー経験に応じて促進することが初めて示された。加えて、観戦による心拍同期は、一体感の促進を介して、試合中の心理的フローと試合後のロイヤリティ（再訪意向）を醸成することも分かった。スポーツ観戦は人々の社会生理応答を通じて、観戦やそのための外出を習慣化し、心身ともにアクティブなライフスタイルを形成するインクルーシブなスポーツ形態として役立つ可能性がある。